

## Joint rescue training with Sendai Air Base, 2nd Regional Coast Guard at Akita offshore wind farm project

October 11, 2024

Marubeni Offshore Wind Development Corporation

A joint rescue training was held at the Noshiro Port site of Akita Offshore Wind Power Co., Ltd. with mobile rescue technicians from the Sendai Air Base of the Second Regional Coast Guard Headquarters of the Japan Coast Guard. The training was covered by the Hokuu-Shimpo and Akita Sakigake-Shimpo newspapers. This was the first time that a rescue training had been held with the Japan Coast Guard at Noshiro Port since operations began in December 2022.

We will continue to cooperate with related parties and strive for stable business operations with safety first.

### Articles from newspapers

<p>洋上風力発電の風車内で負傷者が発生したことを想定した訓練が、能代港湾区域で行われた。発電事業を手がける秋田洋上風力発電（能代市、メンテナンス業務を担う丸紅洋上風力開発（東京）と海上保安庁第2管区海上保安本部仙台航空基地が要救助者を風車内から搬出する手順を確認した。</p>	<p>訓練は、風車内の最下部で作業員が負傷し、倒れているとの想定で実施した。作業員が負傷者を発見し、事務所内のマリンコントロールルームを通じて海保に救助を要請。</p>	<p>訓練は、風車内の最下部で作業員が負傷し、倒れているとの想定で実施した。作業員が負傷者を発見し、事務所内のマリンコントロールルームを通じて海保に救助を要請。</p>
<p>と、高さ約24メートルの位置にある</p>	<p>丸紅洋上風力開発技術統括部の前田啓彰担当部長（50）は「狭い空間で助けなくなっている人をどう救助するかが重要になる。海保の高度な技術を見ることができてよかった」と述べた。（加藤龍太郎）</p>	<p>訓練は13日に開催。秋田洋上風力発電の渡邊卓真所長（55）は「訓練さえしていたら、命が助かっていたはずだったのに」ということが一番あつてはならない。さまざまな想定をした訓練を継続したい」と話した。</p>

### 風車内の負傷者を救出

能代港湾区域 海保と事業者訓練



風車内にいる負傷者を救出するとの想定で行った訓練（丸紅洋上風力開発提供）

Akita Sakigake-Shimpo (September 23, 2024)

# 区域港湾能代 洋上風車で救助訓練 発電所2社 と海保高 基礎内部の作業事故想定

能代、秋田両港の洋上風力発電所を運営・管理する2社と、海上保安庁第3管区海上保安本部仙台航空基地(宮城県黒川郡大川町)の合同訓練が13日、能代市の能代港湾区域にある洋上風力発電設備で行われた。海上に立つ洋上風車基礎の最下部で倒れた作業員を救助する訓練で、狭い空間で迅速に負傷者をストレッチャーで運ぶ手順などを確認した。同港で海保とレスキュー訓練を行うのは4年12月の運転開始以来、初めて。

能代、秋田両港風力発電所の事業を手掛けた「秋田洋上風力発電」(AOW、同市日和山下)風車本体の運転保守を担う「ベスタス・ジャパン」(東京)、風車の基礎や海底ケーブル、陸上送電設備の運転保守と人員輸送船の運航管理を行う「丸紅洋上風力開発」(MOWD、東京)の3社で発電所を運営。協力会社「アチ△」(大阪市)を含む総勢約60人体制で進めている。訓練では、海面から約24メートル突き出た風車の基礎内部の最下部で作業中に倒れた人を救助する想定で実施。仙台航空基地の機動救難班から5人、AOWから3人が参加した。簡易になった基礎の内部では通常3人1組で点検を行う。基礎の最下部で倒れた作業員を、上で吊るる別の作業員が見つけ、同社の



洋上風車の基礎内部で作業員をストレッチャーで救助する海保の機動救難班(能代港で)

「マリンコントロール」を通じて118番通報

して、海保に救助要請した。仙台航空基地の機動救難班が洋上風車に到着し、現場指揮者を決めて全体の状況を把握。コントロールルームから風車の運転状況や内部環境に関する情報を入力し、マンホールを開けて直径1メートルの狭い筒状の空間を降り、電動ウィンチを使って24時間の基礎上部まで引き上げた。基礎内部のはしこから落下して背中を強く打ち、仲間による救助が困難と判断されるケースでも実施。救難班が狭い穴からストレッチャーを最下部に降ろし、負傷者を上まで運ぶ手順を確認した。

能代港・秋田港洋上風力発電所の渡邊重真所長(36)は「洋上風車の事故はイクストリームな状況で1分1秒を争う。アクセスしづらい基礎の内部の狭い空間を実感しながら、迅速に救助する訓練を行う意義は大きい」。能代事務所の佐藤俊介所長(43)は「洋上風車は海で行う事業なので陸以上にリスクが伴う。救助も簡単ではないので、事前に事故を想定し有事に備えることが重要。従事者の異動も考え継続的に訓練したい」と話した。

基礎の点検では事前に内部の酸素濃度を計測しファンで10分間送風してから入るなど、作業員の安全を確保するための手順がある。MOWDの副田啓彰技術統括担当部長(50)は「海保のレスキューはスピードや安全確認などれをとって高度な技術で、われわれのレスキューにも反映させたい」と述べた。